心の中に

ROLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の中に

【Ｎコード】
Ｎ３１０８Ｃ

【作者名】
ＲＯＬＬ

【あらすじ】
七年前、秋月優斗は幼馴染の神山双葉に恋をしてた。そんなある日、偶然出会った柳双葉に、道案内をしている所を見られ関係はぎくしゃくしてしまう。それから七年後の現在、優斗が付き合っているのは柳双葉。七年前一体何があったのか？幼馴染の双葉は何処へ行ったのか？そして優斗がもつ不思議な過去とは？

第1話：映画

あれからもう七年の時が流れた。
今思い出しても不思議な出来事でしかない。時々ふと神様が与えてくれたチャンスだったと思う。でもそれが正しい答えかどうかは分からないし、何が正しいかなんて分かる日も来ないだろぅ。
俺はあの日に感謝している。自分の気持ちを伝えることができたのだから。
後ろから俺を呼ぶ声が聞こえる。振り返ると双葉が手を降ってこっちに走ってくる。どこか懐かしい感じだな。俺はふとそう思った。

七年前の夏。俺は今いる場所にいた。この日も俺は双葉を待っていた。名前は一緒だが別人の双葉を。
少し時間がたつと双葉がやってきた。少しだけいつもよりオシャレをしているようでそれが俺を嬉しくさせた。
「優斗。遅れてごめん」
「別にいいよ。いつものことだし」
「別にいつもはしてないもん」
俺、秋月優斗と神山双葉は幼なじみだった。そして俺は双葉に恋をしていた。
この頃はまだ今の彼女の柳双葉とは出会ってすらいなかった。
「それにしてもいきなり映画なんて。どうしたの」
本当の理由なんて言えるはずなくて、俺は適当に言っといた。
日曜日ということもあって映画館にはがたくさんの人がいた。
「優斗どれ見る？」
「双葉が見たいものでいいぜ」
「本当？じゃあ、あれにしよう」
双葉が指を指してそう言った。その方向をみると大きなポスターが

あった。タイトルを読んでみた。
「君はいつまでも僕の心の中に」
ちょうど話題になってる映画で俺も知っていた。双葉は話題になっているものは何でも興味をもつ。この映画を選ぶのも頷ける。
そんなことを思った瞬間嫌な予感が俺の頭をよぎった。その時の俺は何でもないと思っていたが。
「優斗早く入ろう」
そう言う双葉に手をひかれ中に入っていった。

第2話：手をつないで

映画館の中は結構すいていた。俺達が見ている映画はそろそろ公開終了だからこんなもんだろうなと思っていた。
隣では双葉が真剣な表情で映画を見ていた。
一方の俺は考え事ばかりしていたため殆ど内容をつかめていない。
分かるのは主人公が適と戦ってピンチになっていることだけだ。

あの日もちょうどここで映画を見ていた。

今でも強く覚えているのは、俺と双葉は泣いていて知らず知らずね内に手を握っていたことだ。本当に無意識だったから双葉の手が暖かったのか冷たかったのかすら覚えていない。
「いい話だったね」
帰り道で双葉がそんなことを言った。
「あぁ。そうだな」
俺はそんな素っ気ない返事をした。
「あんな恋ができたらいいのにね」
「そうだな」
正直いうとそんな事思っていなかった。大切な人はいつまでも側にいてほしいから。
確かに映画の恋もいいなぁとは思ったりした。でも、もしもいつか誰かと愛し合って幸せの途中にその人がなくなるなんて考えられない。
俺達はその後無言で歩いた。歩いていると二人の手がぶつかった。
最初は戸惑ったけどそのまま二人手をつないで歩いた。
あの時のはしっかりと覚えている。双葉の手は暖かかった。

少しだけ過去を思い出してる内に映画も大詰めをむかえていた。

今気付いたけど双葉は俺の手を握っていた。俺がそれを優しくにぎりかえすと双葉はこっちを見て優しく微笑んだ。

映画が終わって今はレストランの中にいる。どこにでもあるようなファミレスだ。
双葉は興奮した様子で映画について一生懸命語っている。俺は内容がほとんど分かんないから相槌をうつしかない。ちゃんと見るべきだったと後悔した。
２時間ほどして俺達は帰路を歩いていた。
まるであの日のように。
手をつないで。

第3話：冷やかし

双葉とのデートから二日たって俺は勤務二年目の会社で働いていた。学生の頃がなつかしい。この季節よく思う。学生達は一週間前にせまった夏休みをまだかまだかと心待ちにしている。

「俺も夏休みほしいな」

そんな事を呟いてみる。

「分かる。分かるその気持ち」

同僚の古谷が声をかけてきた。よくあんな声が聞き取れたよな、と感心する。

古谷とは仕事場の中で1番中がいい。よく一緒に飲みにいったりする。

「せめて10日ぐらいはほしいよな」

古谷が話をふってくる。

「確かになぁ。泊まりがけの旅行とか行ってみたいしな」

「なぁ」

ここまで話して上司がこっちを見ているのに気付いてお互い仕事に集中した。

会社からの帰り道で多くの学生とすれ違った。そんな中で双葉と映画を見たことを学校で冷やかされた事を思い出していた。

その日も双葉と一緒に学校へ登校していた。教室に入ると双葉は仲良しの女子グループの中へと入っていった。俺も男子グループの中へと入っていく。すると一人の男子が声をかけてきた。

「みたぜ。神山とデートしてる所」

周りにいたほかの男子がいっせいにこちらを見た。

「違ぇよ。別にデートなんかじゃねえ。ただ一緒に映画を見てただけだ」

「そういうのを世間ではデートって言うんだよ」
そう言われると何も言い返すことができない。
まさか、同級生に見られてるなんてこれっぽっちも思ってなかった。
それもよりによって口の軽い事で有名な新沢信吾に。
「信吾。とりあえずもうその話はするな。広がったらこまる」
「どうして。付き合いを隠したいのか？」
「付き合ってるなら別にいいけど。実際付き合ってないしな」
「付き合ってないのに映画行ったのか。幼馴染って思ってたより凄いな」
付き合ってないという言葉が出たとたん周りから多くの声が聞こえた。
「なんだ神山さん付き合ってないのか」
「よかった。よかった。初恋が失恋で終わるところだったぜ」
「まぁ神山さんと優斗じゃつり合わないしな」
つり合わないって言葉に一瞬苛立ったが無視をした。

変なことを思い出しながら歩いてると前から男子高校生のグループが歩いてきた。結構話し声が大きく自然に耳に入ってきてしまう。
「いいなぁ。彼女ができてよ」
「まったく。羨ましいばかりだぜ」
そんな声がする。一人が顔を赤くしながら歩いてるのを見ると冷やかされてるようだ。七年経った今も何も変わらないんだなと思う。
そういえばあの日帰り道でも冷やかしを受けたような気がする。

下校も俺と双葉は一緒だった。俺は軽音部で双葉は吹奏楽部と二人とも部活動をやっていたのでほとんど時間はずれなかった。
いつもの道を歩いていると信吾がいるサッカー部メンバーに会った。
会った瞬間嫌な風が俺の首を吹き抜けて行った。
「お前ら本当は付き合ってんじゃないのか？」
「違ぇよ。別に登下校はいつも一緒だろ」

「そりゃそうだけどさ。あれを見た後だしな」
「いや、だから違うって」
双葉をあまり状況を読み込めず突っ立っていた。
「まぁいいや。とりあえず俺は信じてるから。じゃあな仲良し夫婦」
そう言って信吾たちは歩いていった。
この後俺は双葉にいろいろと説明する羽目になった。双葉は少し顔を赤くしていた。
それをみて俺は素直に可愛いと思った。

第４話：出会い

世間では夏休みに入った。俺にはまったくもって関係ないことだが。
今日は仕事が休みなので双葉と一緒に遊びに来ている。といっても散歩しながらとりとめもない話をしているだけだった。
「優斗。私達が初めて出会ったのも夏休みだったよね」
「あぁ。そうだったな。そこらへんの木の陰で双葉が休んでたんだよな」
「正確には覚えてないんだね」
「しょうがないだろ。もう七年も前の事だぜ」
「私はしっかり覚えてるけどね。ほらあそこの木だよ」
そういいながら双葉は一本の木に指を差した。
「そう言われると確かにそんな気もする」
俺達はその木の木陰で休む事にした。
「なんか少し変わっちゃってるね」
「そうだな。でも暑いのだけは何一つ変わってないな」
「だねぇ。あの日も今日みたいに暑かったしね」
「あぁ」
そう言って双葉と初めて出会った日のことを思い出した。

「出かけてくる」
その日は家にいても暇だったので出かけることにした。あてはなかったけどブラブラしてれば何か見つかるだろうと思っていた。
３０分ほど歩いて俺はその場所についた。なるべく陰に入りながら歩いているとふと木陰で座って休んでいる女の子を見つけた。
歳は俺と同じぐらいかなと思いながらそのすぐ側を横切ろうとしたが、その時
「あのぉ。すいません」

その女の子は俺に声をかけてきた。
「なんですか？」
俺は穏やかな口調でそう返した。こんな蒸し暑い中良くこんな喋り方ができたと自分で自分を褒めていた。
「そのぉ。桐春高校ってどこだか知っていますか？」
そこは俺の通う学校だった。
「知ってるけど。どうかしました？」
「夏休み明けから通うことになったんですが、その前に見とこうかなって思って探しながら歩いてる内に迷っちゃって途方にくれてたんです」
「ここから15分ぐらいのところだけど案内しようか？」
「いいんですか？ありがとうございます」
「礼はいいよ。どうせ暇だったし」
「本当にありがとうございます」

これが俺達の最初の出会いだった。
そして歩いてる途中で多くのことを知っていく。ていっても名前や俺と同い年って事だけだったけれど。

「帰りは大丈夫なの？」
学校の周りを見た後帰るといいだした彼女に聞いてみた。
「えぇ。母がむかえにきますから。
「そぅ。じゃあ俺は行くね」
「優斗さん本当にありがとうございます」
「じゃあね。柳さん」

この頃はまだお互いさん付けだったり、苗字で呼んでいたりした。
双葉と別れてからは何もすることがなくてブラブラしていたがあまりにも暑かったので、ゲームセンターに入る事にした。

狙い通りクーラーがきいてたので気持ちよかった。
その時携帯電話がなった。急いで名前を確認して出ると
「さっさと、取りなさいよ」
双葉の声が耳に飛び込んできた。
「いきなり、なんなんだよ」
「あんた彼女いるじゃない。それなのに私と映画を見たの？」
俺は唖然とした。何だ彼女って。何を見たんだ？
「よく話がつかめないんだけど・・・」
「さっき歩いてたでしょ。学校の近くを。女の人と仲良さそうに」
そういうことか。俺は納得した。
「双葉、お前それ勘違いだよ」
「何が勘違いよ。最低男」
そう言われて一方的に電話を切られた。
あいつの悪い癖だ。感情的になると一切人の話に耳を傾けない。
「はぁ」
俺は溜息をついた。これからどうしようか考える気になれなかった。
一度怒った双葉にいろいろ説明して物事を落ち着けるのはかなり難しい。とりあえず俺はゲームセンターを出た。

「私から声をかけたんだっけ？」
双葉がそう声をかけてくる。
「あぁ。確かそうだったな」
今の彼女の双葉にはあの事を話していない。もう一人の双葉とケンカしたことを。
知ってもどうせ意味ないことだ。それに彼女の前で他の女性の話しはしないべきだろう。

「そろそろ行こうぜ」
そう言って立ち上がると続いて双葉を立ち上がった。
「じゃあ。いこっか」

俺達二人は並んで歩いていった。

第5話：3人の気持ち

柳双葉との出会いから一週間がたった。
世間はまだ夏休みでみんな楽しそうな笑顔を振りまいているのに、
俺はかなり沈んでいた。
理由は簡単だ。あの日から幼馴染の双葉が口をきいてくれない。電話すらもシカトされる。
好きな人に無視されるのは、どれほどつらいのか身に染みて分かった。
とりあえず、なんとかしなければならない。そうは思っても何も思いつくことができない。
「はぁ・・・」
溜息をつく。考えてしまうのはこれからどれ位の間、シカトされるんだろう。
「はぁ・・・」
また溜息をつく。ここ一週間で何回目だろう?考えたくもなかった。
「もう一度電話してみるか」
俺は決心して携帯電話を手にした。

優斗は分かってくれない。私の気持ちを。
正直言うと、映画に誘われた時、優斗も私の事が好きなんじゃないかと思った。
だから、誘われた時は本当に本当に嬉しかった。
でも、それは私の勘違いでしかなかったらしい。
他の女性と楽しそうに歩く優斗。
そんな姿を見て私はどれ位、傷ついただろう。
優斗は、私の事をどう思ってるんだろう。ただの幼馴染としか思ってないのかな。
そんな事を考えていると、携帯電話が鳴った。

優斗からだと私は確信していた。

早く夏休み明けないかな。もう一度あの人に会いたい。
秋月優斗って名前と同い年と同じ学校ってことしか知りたい。
もっとあの人のことをいろいろ知りたい。
最近考えるのはあの人の事ばかり。自分でも何故かはよく分からない。
こんな気持ち自体が初めてで、何て表していいのか分からない。
夏休みが明けるまで後、約二週間。
学校がこんなに待ち遠しくなったのは久しぶりだ。

電話はつながってる。もうコールも6回目だ。
半ば諦めてはいた。コールが9回目を向かえてきろうとした時
「もしもし」
双葉の声が聞こえた。
嬉しさのあまり変な声を出してしまいそうになった。
「もしもし、優斗だけど、話したい事があるんだ」
「私は別に聞きたくないんだけど」
「あれは誤解だ。ただ道を案内してただけだ」
「本当にそうなのかしら？」
「本当だ。だからいい加減シカトはやめてくれないか？」
「別にシカトなんてしてないけど。優斗の勘違いでしょ」
こういう時の双葉は本当に厄介だ。
「そぅ、分かった。じゃあ、またな」
俺はそう言って電話を切った。

「そぅ、分かった。じゃあ、またな」
優斗がそう言って電話を切った。
本当は止めたかった。もっと話していたかった。
でも冷たく当たってたのもあるからそんな事言えるはずなかった。

完璧に嫌われてる。俺はそう思った。
「これからどうしようかな・・・本当に・・・」
外では何か悪い前兆を示すかのように雨が降り出した。

第6話：告白

前に比べると外で遊んでる、子供が減ったいるようだ。
夏休みも残り3日。学生達は宿題を片付けるのに忙しいに違いない。
今日は久しぶりに雨が降っている。小雨程度だがこれから強くなりそうだ。
俺はあまり雨が好きじゃない。１５年前とかの小学生の頃は好きだったけど。
考えてみると、双葉とケンカして久しぶりに会ったのも夏休みも終わりかけてた時だったな。
そして・・・

まだ双葉とは仲直りせずにいた。宿題なんて手が付けられるはずがなかった。
電話しようかと悩んだが、やっぱりやめとく事にした。
「はぁ・・・」
また溜息だ。ここ2週間ぐらいでかなり老けた気がする。
「優斗、ご飯よ」
下から、俺を呼ぶ声が聞こえる。
「分かった。すぐ行く」
適当な返事を返して自分の部屋を出て一回に行った。
その日の食事のメニューは今でもしっかり覚えていた。
カレーだった・・・。確か3日連続だったような気もする。
「そういえば、優斗」
母が唐突に話を始めてきた。
「何？」
「あんた最近。双葉ちゃんと会ってないんじゃない」
「別にそんな事ないけど」
「そぅ。なら、いいんだけどね」

間抜けそうな顔して以外に鋭いんだなと素直に思った。
もちろんそんな事自分の親に向かって言える筈がない。
ケンカしてる時だけは普通に言っちゃうが。
ご飯を食べて自分の部屋に戻った。久しぶりにギターを弾いてみる。
自分の覚えている曲を5，6曲やって早めに終わった。
「やっぱり気分が乗らないな」
部屋の中は静かだった。外で泣いている虫の声が良く聞こえた。

少し暑くなってきたので、夜風に当たりながら散歩でもすることにした。
家を出て、適当にブラブラしながら、公園の方へ向かった。
家から5分程度にある公園は、風通りが良くて、結構通っている。
公園はすぐ見えてきた。周りは暗いが蛍光灯の明かりで十分前を確認できる。
初めは気付かなかったが、近付くと人がいるのに気付いた。
どうせ知らない人だろうと思っていたら、それは双葉だった。
「双葉」
俺は名前を読んで駆け寄った。
双葉と会うのは2週間ぶりだった。
今までいろいろケンカはしてきたけど、そんな事はなかった。
双葉は俺が近寄ったのを見ると、逃げ出すように走り出した。
俺はそれを追いかけて手をつかんだ。
「どうして俺を見て逃げるんだ」
「別に逃げてないわよ。とにかくその手を離して」
俺は強く握ってた手を離した。
双葉はもう逃げようとはしなかった。
「双葉。まだ誤解してるのか？」
「もう、うるさいわね」
「俺はお前とぎくしゃくしたままなんて嫌なんだけど」
「別に私はそんなつもりないけど」

「俺はあるんだよ。どうしてシカトしたりするんだよ」
「いつも同じ事を聞かないでくれる。シカトした覚えなんてないの」
「今だって俺を避けるように逃げようとしただろ」
「勝手に勘違いしないで。私はそろそろ帰ろうと思っただけよ」
「分かった。それでいい。とりあえず俺の話を聞け」
「分かったわよ。早くしてよね」
俺は静かに深呼吸した。走って大きい声で喋って少し息切れしていた。
それは双葉も同じで、少し顔が赤くなっていた。
「お前は、俺が女の人と歩いてるのを見ただろ」
「・・・」
双葉は何も答えようとしない。俺は気にせず続けた。
「あれは遊んでた訳じゃない。ただ道案内をしてただけだ」
「・・・」
「あの人、俺達と同い年らしくて二学期から転入してくるらしいんだ」
「・・・」
双葉はまだ何も答えなかった。
俺はそこである一大決心をした。
「それに・・・」
続きの言葉がなかなか出てこなかった。
「それに・・・」
また言い直そうとしたが続きが出てこない。
「それに、何なの？」
双葉が口を開いた。俺は一気に言いたい事を口にした。
「俺が、他の女とデートしたりするわけ、ないだろ」
「そんなの私に分かるわけないじゃない。それに何？その言い訳」
「言い訳なんかじゃない。俺はお前が好きなんだ」
二人の間に沈黙が流れた。俺の顔は真っ赤だっただろう。
「だから、他の女とデートなんかしたりしない」

最初に口を開いたのは俺だった。
緊張の余りに上手く喋れなかったのを今でも覚えている。
「本気で言ってるの？」
双葉を顔を赤くしながら、そんな事を聞いてきた。
「冗談でそんな事は言わない」
また、二人の間に沈黙が流れた。
今度は、双葉が最初に口を開いた。
「私も・・・私もずっと優斗が好きだった」
俺は双葉の言葉に顔を赤くした。
「だから、優斗が知らない人と歩いてるのを見たとき、本当に悲しかった」
俺はただ、だまってその話を聞いていた。
「優斗から彼女とか言われるのが恐くて、それで・・・」
双葉は涙を流し始めた。
「冷たく当たっちゃって。それでどうしたら、いいのか分からなくなって」
「・・・・」
俺はまだ無言でいた。
「ごめんね。私・・・最低だ」
俺は双葉を優しく抱きしめた。双葉は俺の胸の中で泣いた。
「ごめんね。ごめんね」
双葉はそれを繰り返した。
「いいよ、別に。気にしないで」
俺はそう言って双葉の背中をさすっていた。
１０分ほど俺達はこうしていた。双葉は泣き止み俺から離れた。
「なぁ。双葉」
「何？」
「俺と付き合ってくれないか？」
少しだけ沈黙が流れて
「うん。いいよ」

双葉は笑顔だった。久しぶりに見た笑顔はとても可愛かった。
「ふぅ」
俺は今までの心配ごとが全部吹っ飛んだ。
「どうしたの。そんな溜息ついて？」
「別に。体が軽くなった感じがしてさ」
俺は久しぶりにぐっすり眠れそうな感じがした。
「ねぇ、優斗」
「何だ？」
「明日さ、久しぶりに遊びに行かない？」
「あぁ。いいぜ俺達の初デートだな」
「そういう事になるね」
「じゃあ、時間とかはどうする？」
「後で、電話で決めよう」
「分かった。じゃあ後でな」
「うん。バイバイ」
俺達はお互い手をふって別れた。
明日が楽しみで今日も眠れそうにないなと俺は思った。
「まぁ、こういうのなら悪くないけど」
そんな独り言を呟いて、俺は家へと歩いた。

あの日、まさか告白するなんて思ってもみなかった。
七年経った今でも、どうして決心したのか良く分かっていない。
結局、あの後俺達にはすぐに別れがやって来た。
そして今の俺の隣には柳双葉がいる。
人生ってものはよく分からないものだ。
永遠に続くと思ってた幸せは簡単に終わりを告げ、隣には違う人がいる。
あの頃の俺がこんな未来を予想していたはずがない。
そんな考えを巡らせた後、俺は仕事に戻った。

第7話：初デートと

「古谷、お前今日どうしたんだ？」
「どうしたって？何がだよ」
「なんかいつもより機嫌がいいなと思ってさ」
「やっぱ分かっちゃう」
古谷はすごい笑顔だ。ちょっと気持ち悪いな。
「まぁな。それぐらい笑顔だとな」
「今日さ、彼女とデートなんだよ」
デートが嬉しいのは分かるけど、ここまで喜ぶことなのか？
「俺にとって初デートなんだよねぇ」
それなら納得できた。
お世辞にも古谷はかっこいいとは言えない。
性格はいい奴だから彼女とかいるとか思っていたがそうでもなかったらしい。
「はやく、仕事終わらねぇかなぁ」
「少しは落ち着けって」
気持ちが分からないわけでもない。
俺も初デートの時はこれに近い感じだったはずだから。

「分かった。場所は中央公園噴水前で時間は１０時だな」
「うん。初デートなんだから遅刻とかなしだからね」
「分かってるって。じゃあな、また明日」
「うん。バイバイ」
告白してから一時間後の電話だった。
明日の初デートの内容を二人で電話で決めていた。
俺は予想通りこの後、あまり寝付けず次の日遅刻しそうになった。

「上手くいくといいな」

「ありがとよ。そう言ってもらえると嬉しいぜ」
古谷はそう言って俺の肩をポンポンと叩いた。
俺達二人はそろって仕事に戻る。
初デートの話をしたからか、あの日の事が鮮明に頭の中に蘇る。

「はぁはぁ・・・やべぇ遅刻する」
俺は一所懸命待ち合わせ場所に向かって走っていた。
待ち合わせ場所にはもう双葉は来ていた。
「ふぅ。危ねぇ・・・」
「もう。いきなり遅刻しそうになるなんて」
「悪い、悪い。昨日あんまり寝れなくてさ」
「間に合ったんだから別にいいわ。それより早く行こう」
「ちょっとだけ待って」
「もう、だらしがないんだから」
そう言いながらも双葉は俺に合わせてくれた。
「もう大丈夫でしょ？行こう」
「分かった。待たせて悪かったな」
「別にいいわよ。いつもは私が待たせてるし」
「そういえばそうだったな」
「何よ。悪い？」
「別にそんなこと言ってねぇよ。ほら、行こうぜ」
俺は双葉の手を握って歩き出した。
双葉は顔を少し赤くしながら俺の隣を歩いた。
２０分程歩いてついたのは遊園地だった。
一日フリーパスを買って中に入る。
この遊園地は初めて来たがなかなか大きい様子だった。
「ねぇ。どれから乗ろうか？」
「う～ん。じゃ、あれから乗らねぇか」
俺はそう言って指を差した。その指の先にはジェットコースターがあった。

「え・・・」
双葉は絶叫系が苦手だった。
俺はそれを知っていたがあえて選んでみた。
「嫌か？」
「優斗と一緒なら平気。さぁ行こう」
まさかこんなに早く決心するとは思ってなかった。
その日は夏休みではあったが平日だったので思ったより人は少なかった。
「結構、早く乗れそうだな」
「うん、そうだね」
１０分も経たない内に俺達はジェットコースターの席に座った。
隣を見ると双葉が少し震えている感じだった。
「おぃ。大丈夫か双葉？」
「少し恐いだけだから平気・・・」
「そうか」
俺は提案した事を少し後悔し始めた。
「ねぇ。優斗」
「何だ？」
「手を握ってくれない」
そう言って双葉は俺に手を差し出してきた。
俺は何も言わずに双葉の手を握った。
「ありがとう」
双葉はそう言って前を見た。
ジェットコースターがスタートする。
どんどん高くなっていくのはさすがに少し恐怖を覚える。
一番高いところまでジェットコースターがのぼると、
いきなりとてつもないスピードで下り始める。
「キャー」
周りからそんな悲鳴が聞こえる。
双葉は俺の手を強く握っている。

結構短いコースだったため終わるのは早かった。
ジェットコースターから降りると双葉は本当に安心したようだった。
「悪かったな。あれに乗りたいって言って」
「大丈夫だよ。じゃあ次は私が決めていい？」
「あぁ」
「じゃあ、あれに入ろう」
一瞬、嫌な感じがした。俺の予感は的中だった。
双葉が入ろうといったのはお化け屋敷だった。
俺は情けない話だがホラーとかそういう物が大の苦手だった。
５歳ぐらいの時に母が見ていたホラーの番組を、
たまたま見てしまい泣いたことがあった。
それがトラウマとなって今でもホラーが苦手となっている。
勿論、双葉はその事を知っている。
俺はやられた、と思いながらしぶしぶと双葉についていった。

入った途端に冷や汗が出始めた気がする。
自分では精一杯普通に振舞っていたつもりだが双葉は隣で笑っていた。
だからといってありのままの自分をさらけ出す事が出来るはずがなかった。
お化け屋敷にいた時間は１０分もなかったと思う。
だけどあの時の俺にとってはあの時間は１時間以上にすら感じられた。
これからは人をからかうのは、やめようと反省した。

その後、俺達はいくつか乗り物にのって昼食にすることにした。
昼食は、双葉の手作りだった。
双葉は見かけによらず料理が上手だった。
幼馴染ということもあって、味付けも俺のつぼにはまってた。
「どう優斗、おいしい？」

「あぁ、おいしいよ」
「そぅ、それなら良かった。作るのに2時間もかけたのよ」
だからこんなに量が多いのか。
「へぇ。わざわざありがとな」
俺は礼を言ってから凄いスピードで食べ始めた。
寝坊して朝食を食べてなかったからしょうがない事だった。
「そんなに急がなくても、なくならないわよ」
俺は途中で何度も喉に詰まらせてむせていた。
その度に双葉がお茶を差し出してくれた。
食べた後は一時間ほどお喋りしながら休憩してた。

休憩した後は、乗っていないアトラクションに乗ったりして遊んだ。
時間が6時ごろになった頃俺達は、遊園地を出た。
「楽しかったねぇ」
「あぁ。あんなに遊んだのは久しぶりだ」
そんな会話をしながら俺達は歩いていた。
歩いている途中に、双葉がこんな提案をした。
「ねぇ、優斗。公園寄って行かない」
「別にいいけど。何処の？」
「そんなの決まってるでしょ。優斗が私に告白した公園」
「そこしかないか。いいよ、行こう」
俺達二人は目的地を公園にしてそこへ歩を進めた。
公園についた頃はもう7時をまわっていて、人はいなかった。
時々公園の前を通る人は少しだがいた。
俺達はベンチに座って、星を眺めた。
「綺麗だな」
「そうね」
しばらく沈黙になったが悪い雰囲気ではなかった。
俺は手をベンチの上に置こうとして動かすと双葉の手にぶつかった。
その拍子に双葉がこっちを向き俺と目が合った。

俺達はそのまま2、3秒ほど見詰め合った。
そして、そのままキスをした。
二人とも緊張してぎこちないキスだった。
「しちゃったね」
「そうだな」
俺達の間にはまた沈黙が流れた。
周りが静か過ぎて自分の鼓動の音が大きく聞こえた気がした。

気付けば、仕事の終了時間が近付いている。
古谷はもう片付けの準備をしている。
気のせいか、さっきよりもウキウキしているように見える。
俺も片付けの準備を始める。
二人とも片づけが終わって一緒に会社を出た。
「じゃあな、これから待ち合わせだから」
「おぅ。ガンバレよ」
「分かってるって」
そう言って寺谷は走っていった。

俺の最初の恋は報われなかった。
あいつの恋は報われるといいな、と素直に思った

第8話：転勤？

「明日から二学期だよ。初日から寝坊したりしないでよ」
「分かってるって。少しは信用しろって」
「はぃはぃ。じゃあ明日ね」
「おぅ」

「はぁ」
明日から学校だと考えると溜息が漏れる。
今年の夏休みはいろいろありすぎて宿題どころではなかった。
毎年全て終わるわけではなかったが、過去最高をマークした。
「もういい。寝る」
半分以上残った宿題をそのままにして俺は眠った。

「お～い。秋月」
会社の前で古谷が声をかけてくる。
「昨日はどうだった？」
「成功って言っていいかな。いい感じだったし」
「それはよかったな」
「まぁな」
古谷は昨日と同じぐらいの笑顔だ。
「それよりさ、秋月、お前部長の噂聞いた？」
「何だそれ？」
「部長さ、違う部署に転勤だってさ」
「本当かよ」
「あぁ。まだ決まってないけど可能性は高いってさ」
「早く決まってどっか言ってほしいぜ」
俺は素直な思いを口にした。
俺と古谷の部長は本当に最低な奴だった。

男には厳しく女には優しくといった、気持ち悪い奴だ。
勿論、仕事場では凄い嫌われている。
本人は気付いてる様子がないから余計にたちが悪い。
「行った方があの人の為にもなるだろ」
古谷がそんな事を言う。
確かに俺もそう思う。
部長の影でセクハラ親父と言われている。
ストレートすぎる所が本当に嫌われてる証拠だろう。
「じゃあ行こうぜ、秋月」
「あぁ」
俺達二人は揃って会社に入っていく。

会社の中では同じ話題で持ちきりだった。
一人の女性社員が俺に声をかけてくる。
「秋月君、聞いた？部長の話」
確か名前は、後藤天音で俺と同い年だった。
「ついさっき、古谷から聞いたよ」
「秋月君はどっちがいい？」
「どっちがいいって？」
「ほら、その部長が残るか、残らないか？」
「もちろん残らないで欲しいけど」
俺は躊躇いもなくはっきり口にする。
「やっぱり皆同じ意見だね。ありがとう」
「別に構わないよ」
俺がそう言うと彼女は友達の所へ行った。
「よかったね、秋月と話せて」
そんな声が聞こえた気がしたが聞き間違いだと思い気にしなかった。
部長の転勤かぁ。本当に早くしてくれればいいのに。
ふと、俺の彼女が転入してきた事を思い出した。
あの時はまだ俺は幼馴染の双葉と付き合っていたし、

あんな事がおこるなんて少しも考えてなかった。

「もう、優斗、少しぐらい急いでよ」
「大丈夫だって、間に合うから」
「もう、まぁいいわ」
俺達は二人歩き出した。
長い夏休みを終えて二学期が始まる。
俺はまだ夏休みの感覚が強かった。
毎年のように夏休みボケをしていたようだ。
歩いていると、多くの学生とすれ違う。
当然といえば当然だが、夏休みの後は懐かしく感じるものだ。
「久しぶりにこの道一緒に歩くねぇ」
「まぁ夏休みは一度も通ってねぇしな」
そんな会話をしながら歩いて俺達は学校についた。
玄関の方に行くと、クラス替えの掲示板がある。
俺と双葉は自分のクラスを確認する。
「お、俺3組だ」
「私も、私も3組」
俺達二人はまたクラスになった。
俺達はそれは素直に喜んだ。
俺は他のクラスメイトを確認する為に自分のクラスの所に目をやった。
そこには俺だけが知っている名前があった。
柳　双葉
まさか同じクラスになるなんて。
俺は今までにないぐらい嫌な予感がした。
「大丈夫だ、双葉には説明してあるんだ」
俺は誰にも聞き取れないような声で呟いて双葉の元へ戻った。

「秋月、秋月」

古谷が俺を読んでいるようだ。
「何だ？」
「部長の転勤、ガセネタらしい」
「・・・・・・」
言葉が出てこなかった。
「お前も俺と同じ反応だな」
「・・・・・・」
「期待がでかい分こうなるよなぁ」
「あぁ」
やっとのことで出た声がそれだった。
本当に本当にがっかりだ。

第9話：転入

部長が部屋に入ってきた。
暗くなってた部屋の雰囲気はいっそう暗くなっていた。
部長はいつもの席に行くと皆に集合をかけた。
「皆、この時期珍しいが新入社員の紹介だ」
少しだけざわめきが聞こえた。
「入ってきてくれ。中野君」
ドアを開けて入ってきたのは俺より1つ年下ぐらいの女性だった。
「さぁ。自己紹介をしてくれ」
彼女は少し部長に怯えてるようだった。
もうなんかしたのか？セクハラ親父
俺はそんなことを考えた。もちろん皆もそうだろう。
「中野桃子です。今日からお世話になります。よろしくお願いします」
一斉に拍手が起こった。
男グループから可愛い等と言った声が聞こえる。
その時俺は七年前を思い出していた。

「今日から、この学校に通う事になった柳双葉です」
俺はそっと双葉に目をやった。
明らかに柳さんを見て不機嫌になっているようだった。
やっぱり俺の勘は良く当たるとこの時確信した。
男のグループからは
「可愛いぜ」
「すげぇ。好み」
そんな声が聞こえてくる。
誰か一人が柳さんと付き合ってくれないかと期待した。
自己紹介も終わり、ＨＲも終わった。

柳さんは多くの女生徒に囲まれていた。
その時、双葉が俺の側に寄ってきた。
「どうした？」
俺が聞いてみると
「別に、何でもないわよ」
「本当か？」
「ないって言ってるでしょ」
何故怒っているのかは良く分かってるつもりだった。
確かに心配になるだろうな。
「おい、優斗」
男友達が一人声をかけてくる。
「なぁなぁ。お前って神山さんと仲いいだろう？」
「まぁな。付き合ってるしな」
「え？」
「どうかしたか？」
「だって・・・お前付き合ってないって言ってたじゃん」
「あの時はな。その後付き合い始めたんだし」
俺達がそんな会話をしてくると多くの男子が集まった
「お前、神山さんと付き合ってるのかよ」
その声が大きく女子にも広まったようだった。
「え、双葉。秋月と付き合ってんの？」
双葉の方に目をやると顔を赤くしながらゆっくり頷いてた。
「やっぱりそうなったか」
そう言ったのは信吾だった。
「いいなぁ」
そんな声が多く聞こえる。
改めて双葉はもてるんだなと思う。
その騒ぎは結局、授業開始まで続いた。
一度だけ俺は柳双葉の顔を見た。
何処か悲しげだったのを今でも覚えている。

夏休み明け初日という事もあり今日は午前中だった。
久しぶりに会った友達と会話をして楽しんだあと、双葉と帰る事にした。
二人で帰るときには当然のように冷やかしを受けた。
帰り道まだ双葉は少し不機嫌な様子だった。
「おい、双葉どうしたんだよ？」
「別になんでもないわよ」
「まさか柳さんとの事疑ってるのか？」
「違うわよ。私は優斗を信じてる。でも恐いの」
「恐い？」
「そう。優斗が私から離れていった事を考えると」
俺は立ち止まった。そして
「心配するな。俺はずっと側にいる。だから安心しろ」
「うん。ごめんね・・・私・・・」
「いいって。さぁ行こうぜ」
「うん」
少し強がっていた感じがしたが双葉ははっきりそう言って
俺の隣を歩いた。

俺はパソコンの画面と向き合っている。
仕事している中で一番嫌いな時間だ。
嫌いというよりもパソコンが苦手なのでしょうがない。
パソコンと向き合っていると携帯にメールが入った。
相手は双葉だった。急いで内容を確認してみる。
「今週の日曜日、晴れたらピクニックに行かない？」
俺はスケジュール表を取り出して日曜日をチェックする。
ちょうど予定の入ってない日だった。
「その日、予定がないから大丈夫だよ」
俺はメールにそう書いて送信した。

ピクニックかぁ。これも懐かしい思い出だな。

第１０話：ピクニック

約束の日曜日となり俺は双葉とピクニックにきている。
「今日はいい天気だねぇ。ピクニック日和だね」
「あぁ。本当に気持ちいいぐいらいいい天気だな」
「ねぇ。懐かしいね」
「そうだな。そういえば前にも一度来てたな」
「うん。その時私は家族とだけどね。優斗は」
そこまで言って双葉は口を閉じた。
「ごめんなさい。私」
「別にいいよ。あれはもう過去のことだ」
「でも・・・」
「本当にいいんだ。それに暗い話はやめよう」
「分かった。優斗あっちの方に行こう」
「よし、じゃあ競争するか？」
「それなら少しハンデ頂戴ね」
「どんな？」
俺が聞くと双葉は荷物を差し出してくる。
「え・・・」
「優斗は荷物を全部持って走る」
「・・・まぁいっか」
俺はそう言って荷物を受け取る
「よぉい、ドン」
その声が俺の昔の記憶の扉を開く

「優斗、今週の日曜日？」
「あぁ暇だけど。どうかした」
「ピクニック行こう。ピクニック」
「ピクニックかぁ。天気大丈夫かな？」

「大丈夫。大丈夫。じゃあ決定ね」
「分かった。楽しみにしてる」
「うん、頑張ってお弁当たくさん作るね」
そんな会話をしたのはピクニック当日の４日ぐらいだった。
いつも通り一緒に帰宅していた途中だった。
その後、双葉はずっとウキウキしていた。
ピクニックがそんなに嬉しいのか、とは思ったが
そんな双葉の姿を見て俺も楽しい気分だったの覚えている。

ピクニック前日はいい天気だった。
しかし、天気予報では明日の天気は雨だと言っていた。
確か８０％ぐらいの確立だった気がする。
それを見た瞬間、俺は明日は無理だなと思った。
しかし、双葉は明日晴れにしてやると言っててるてる坊主を作っていた。
俺がそれを知ったのは待ち合わせ場所でのことだったけど。

当日はこれ以上にないぐらい快晴だった。
天気予報なんてまったく当てに出来ないなと思った。
待ち合わせ場所に行くと双葉がもう来ていた。
付き合い始めてから双葉は俺より遅く来たことがない。
最初はどうしたんだろうと思っていたが今は慣れてしまった。
「良かったねぇ。こんないい天気になって」
「だな。気持ちいいぐらい天気予報外れたな」
「そりゃ私がてるてる坊主を作ったからね」
「今時、てるてる坊主作ってたの？」
「別にいいじゃない。ピクニック楽しみだったんだから」
俺はその言葉に素直に嬉しいと思った。
天気が良すぎるのも考えもんだと思いながら俺は歩いてた。

隣では双葉が楽しそうに歩いている。
「ねぇ優斗。あそこまで競争しない」
あの時も競争をした。相手は違うし提案したのも俺ではなかったが。
「いいぜ、ハンデはどうしよっか」
「私をなめてるわね。でもせっかくだし・・・」
双葉が俺に荷物を差し出す。
「しょうがない」
俺はそう言って、荷物を受け取った。
勝負はもちろん俺の完敗だった。

「ねぇ、優斗あそこで弁当食べない？」
「そうだな、いい加減お腹すいたな」
「じゃあ行こう」
なんであいつは、まだあんなに元気なんだ。
俺達は木陰に座って弁当を食べていた。
そんな時、後ろから家族連れの声がする。
自分の耳を疑ったがその中には俺の知ってる声があった。
柳双葉だった。家族全員でピクニックにきてたらしい。
「あれ、優斗君と神山さん」
あっちはこちらに気付いたようだ。
「偶然だね。こんな所で会うなんて。驚いたな」
「俺も驚いたよ。柳さんとこんな所で会うなんてさ」
「優斗君達は二人だけできたの？」
「あぁ。俺と双葉の二人だけだ」
「そぅ。じゃあ邪魔しちゃ悪いし私行くね」
「明日学校でな」
「うん。じゃあね」
そう言って家族の所へ戻っていった。
双葉はなんとなく不機嫌な様子だった。
「柳さん、きっと優斗の事好きだよ」

「は？何言い出すんだよ」
「私には分かるの」
「・・・・」
俺にはなんて言っていいのか分からない。
「でも、大丈夫だよね。私は優斗を信じてるから」
俺は優しく双葉を抱きしめた。

よく考えてみれば、あのピクニックが双葉との最後のデートだった。

「優斗、あっちで弁当食べよう」
あの日と似た日常が繰り返されている。
俺はきっとまだ心の中で双葉をさがしているに違いない。
「あぁ、そうだな」
俺達は弁当を食べた。
隣にいる双葉は違う双葉だけど俺は幸せだ。
「双葉、俺はお前との約束守れそうだ」
そう心の中で呟いてみた。

第１１話：前兆

双葉とのピクニックの次の日。
双葉は疲れが溜まって、熱を出した。
俺は心配になって会社を休み看病する事にした。
たかが熱ぐらいでと思う人もいるだろう。
でも、俺には恐かった。
また大切な人を失うかもしれない・・・
そんな事を考えたら働いてなんていられない。

ピクニックの次の日から双葉は体調を崩した。
俺は学校へ行き、昼休みの時間などに電話した。
「ありがとう、心配してくれて」
「だいぶ楽になったから、大丈夫だよ」
双葉はそんな返事ばっかしかしなかった。
それが俺の不安をさらに募らせた。
双葉が学校を休み始めて３日になった時だった。
俺は柳双葉に声をかけられた。
学校で声をかけられるのはそれが初めてだった。
「優斗君、神山さん大丈夫なの？」
「多分、大丈夫だと思うけど。一応今日お見舞い行くつもり」
「そう、お大事にと伝えといてね」
「あぁ。心配してくれてサンキューな」
「じゃあね」
放課後になると俺はすぐに双葉の家へ向かった。
家のインターホンを鳴らすと双葉のお母さんが出てきた。
「あら、優ちゃん。久しぶりね」
「久しぶり、おばさん。双葉はどうしてる？」
「まだ熱が下がらないの。部屋で寝てるわ」

「そう・・・」
「優ちゃん上がって。双葉も喜ぶから」
「じゃあ、おじゃまします」
そう言って俺は神山家に上がる。
「双葉は自分の部屋にいるから」
「ありがとう、おばさん」
二階に上がって双葉の部屋のドアを叩く。
「入ってもいいよ」
双葉の声が聞こえる。
「よぉ。元気か」
「あれ、優斗。来てくれたんだ」
双葉はおばさんが来たと思っていたらしい。
「あぁ。さすがに心配でな」
「わざわざ、ありがとう。でも本当にもう平気」
「そうか？」
「優斗もきてくれたしね」
そんな事をストレートに言われると顔が赤くなる。
「皆、心配してるから早く元気になれよ」
「うん」
俺達はその後、1時間ほど話をした。
「じゃあ、俺行くな」
「うん。今日は本当にありがとう」
俺は手を振りながら部屋の外に出て一階へ行った。
料理の準備をしているおばさんに挨拶をして家を出た。
そして、この3日後に・・・

「優斗、仕事大丈夫なの？」
双葉がそんな事を聞いてきた。
「あぁ。今日は休みをとってある」
「ごめんね。私のために」

「気にしないで休め。おかゆ作ってやるから」
「うん。ありがとう」
同じ思いなんてもうしたくない。
俺は涙が出そうになった。
あの日を思い出した。
辛い辛い過去の扉が開いてしまいそうだ。

第１２話：発病

「優ちゃん。双葉が、双葉が」
そんな電話がかかってきたのは土曜日だった。
見舞いに行った日から3日が経っていた。
「おばさん、今どこにいるの？」
「・・・総合病院」
病院・・・
その言葉を聞いた瞬間寒気がした。
「双葉は、双葉は大丈夫なんだよね？」
「分からない。分からないの・・・」
「おばさん、切るね」
俺はそう言って電話を切って家を飛び出した。
一生の中で一番早く走った時だった。
２０分してやっと病院についた。
受付でいろいろ聞いて、走り出す。
双葉は集中治療室らしい。
その前まで行くとおばさんとおじさんがいた。
おばさんは泣いていて、おじさんが背中をさすっている。
「おじさん、おばさん」
俺はそう言いながら二人に近付く。
「優斗君か」
「双葉は大丈夫ですか？」
「私達にも分からないんだ。結果を待つ事しか」
おじさんはさすっている逆の手で握りこぶしを作っている。
俺は初めて自分の無力さを痛いほどに感じた。
大切な人が苦しんでるのに出来るのは待つだけ。
息切れしているのもあったからかは分からない。
胸が苦しかった。今までの何よりも胸が苦しかった。

苦しくて苦しくて涙が出る。
でも、出来るのは祈る事だけだった。

俺達、3人は無言だった。
20分ほどして俺の両親がやってきた。
「双葉ちゃんは大丈夫なの？」
俺と同じ質問をする。
答えを聞いた母は泣き出し父が背中をさする。

集中治療室のランプが消えた。
俺がここに来てどれぐらいの時間がたっただろう。
主治医らしき人が出てくる。
おばさんが駆け寄り、
「双葉は、双葉はどうなんですか？」
「ひとまず、大丈夫です」
その答えに全員が胸を撫で下ろす。
「しかし・・・」
全員が一斉に険しい顔になる。
「いいにくい事ですが、明日をむかえられるかどうか」
「・・・・・」
誰も言葉を発せない。そんな勇気が出ない。
「双葉さんは、今までにない病気にかかっています」
「それって・・・」
「医学界に今までなかった病気です。」
「・・・・・・・」
「私達にはどうしようもありません」
「・・・・・・・」
何も言えない。出てくるのは言葉じゃなくて涙。
双葉があと一週間。そんなはずはないだろ。
必死に否定しても、涙が止まらなかった。

医者が嘘と言うのを心のどこかで期待していた。
でも、そんな事ないのは分かってた。
だから涙は止まらなかった。

手術が終わって、双葉は目を覚ました。
時間はちょうど8時ごろだった。
今は部屋でおばさんとおじさんが話していた。
２０分ほどして二人が出てきた。
「優ちゃん。双葉が話したいって」
俺は部屋に入った。
そこには横たわったままこっちに笑顔を見せる双葉がいた。
俺は涙を堪えるのに必死だった。

第13話：伝えられない言葉

「双葉」
ベッドで横になっている双葉にそう声をかけた。
「ねぇ、もうちょっと近くにきて」
俺は双葉の方へと近付き椅子に腰をおろした。
「ねぇ、優斗。私思うの」
「・・・・・」
俺は黙って話を聞く。
「私ね・・・」
双葉の言葉が止まった。涙が出ていた。
俺も涙が出てきた。止まらなかった。
「私ね、私、優斗と幼馴染で嬉しい」
「俺もだよ・・・双葉」
「だって、優斗と幼馴染だったから私達付き合えたでしょ」
「・・・・・・」
俺は言葉を出せなかった。胸が詰まりそうだった。
「ずっとね、ずっと好きだった。小さい頃から」
「あぁ、俺も小さい頃からずっと双葉を見てた」
「優斗はね、私なの」
「・・・・・・・」
「優斗がいて私が成り立ってるの。
優斗がいなきゃ、私はここにいないと同じ」
「俺にとっても、お前はそんな存在だよ」
「嬉しい、そう言ってもらえると」
「本気だよ、本当にそう思ってる」
言葉が出てるかなんて分からなかった。
「優斗、ごめんね」
「謝るなよ。お前は悪くない」

「でも・・・ごめんね」
俺達二人は思いっきり泣いた。
自分達の感情を思い切りさらけ出して。
「ねぇ、優斗」
「何だ？」
「最後にね、伝えたい事があるんだ」
「最後なんて言うなよ。ずっと側にいろよ」
「この先、私がいなくても幸せになってね」
「・・・・・」
俺は何も答えなかった。
双葉と以外幸せになりたくないと思った。
「きっと、私のように優斗を愛してくれる人がいるから」
なんて言えばいいのか俺には分からなかった。
「だから・・・だからね」
「あぁ」
「絶対幸せになってよね。それが私との最後の約束」
「分かった、約束する」
したくなかった。本当はしたくなかった。
でもするしかなかった。
俺にはそれが痛いほどよく分かった。
俺は双葉の手を握った。そして、
「双葉、俺も双葉に伝えたい事があるんだ」
双葉は返事をしてくれなかった。
「双葉、双葉返事してくれ」
俺の声があまりにも大きかったのか、
両親やおじさん、おばさんが中に入ってきた。
俺は泣きながら双葉と叫んでいる
「双葉、双葉」
双葉が返事をしてくれる事はなかった。
部屋にいる全員が泣いていた。

俺は長い間、双葉の名前を叫んでいた。

俺は眠らないまま、朝を迎えた。
その時には、何かを考えられるほどには、なっていた。
双葉に伝えたかった事を結局伝えられなかったな。
俺の中にあるのは後悔や悲しみばっかりだった。
「双葉どうして死んでしまうんだよ。
俺まだお前に伝えたい事だってあったのに」
そんな思いは涙に変わっていくばかりだった。

第１４話：奇跡の再会

今日は、双葉が亡くなってちょうど七年目だった。
俺は双葉の墓の前にいた。
「双葉、お前との約束通り俺は幸せにやってるよ」
俺はそう語りかける。もちろん返事はない。
後ろから足音が聞こえてくる。
「あら、久しぶりね。優ちゃん」
おじさんとおばさんだった。
おばさんは、俺の事をまだ優ちゃんと呼ぶ。
俺も、もう２４歳なのにな。
「お久しぶりです。おじさん、おばさん」
去年のこの日にあって以来だからちょうど一年ぶりだ。
「毎年ありがとうね」
おばさんが言った。
「当然の事です。双葉は俺にとっても大切だったから」
俺は空を見上げた。
「双葉、元気にやってるか。俺は元気にやってる。
出来ればあの日みたいにお前に会いたい」
俺は心の中でそう言った。
そして、あの奇跡の日を思い出した。

双葉が亡くなってもう3週間が過ぎたころだった。
俺は普通に学校に通っていた。
勿論、明るく振舞う事はできなかった。
皆、俺に心配して声をかけてくれた。
特に柳双葉は俺によく声をかけてくれた。
双葉が亡くなってから、部活には一度もいなかった。
ギター自体ほとんど触っていなかった。

学校が終わってから俺は一人で帰っていた。
友達と一緒に帰れる気分じゃなかった。
その日は家に帰らずブラブラしていた。
気付くと時間は7時をまわっている。
帰ろうかなと思った瞬間俺は気付いた事があった。
俺のいた場所は、双葉に告白した公園の近くだった。
「知らない内に、ここにきてたのか」
俺はすぐ帰ろうとした。
しかし足は公園の方へ向かって歩き出す。
自分でも何故かは分からなかった。
公園まで来るとそこには一人の影があった。
俺の学校の女子の制服というのが少し遠くからも分かった。
どんどん、近くなるごとに、少しずつ顔も明らかになる。
「あ・・・」
俺は驚きを隠せなかった。
なぜならそれは、俺の一番大切な神山双葉だったから。

「優斗、遅いよ」
声もまったく双葉だった。
「どうして、お前がそこにいるんだ」
「いろいろ、あってね。神様が最後にチャンスをくれたの」
「神様？」
正直、信じられなかった。でも信じるしかなかった。
死んだはずの双葉が目の前にいるのだから。
「最後に優斗と話をできるチャンスをね」
頭が良くまわらなかった。涙が出た。
そして、何も言わずに強く双葉を抱きしめた。

「私が死んで一週間ぐらいしてから、

私は毎日、夜7時から10時までここにいたの」
「・・・・・・」
俺は黙って話を聞いていた。
「優斗意外にはね私の姿は見えないの」
「そうなのか」
「うん、なんでだと思う？」
「分かんない？」
「私が一番会いたい人にしか見えないからなの」
「それが、俺なのか」
「うん、そりゃお母さん達にも会いたいけど、
私は誰よりも優斗に会いたかった」
「ありがとう」
俺は素直に礼を言った。
「でもさ、何で双葉は制服なんだ？」
「こっちにくる条件はね、いろいろあるの」
「そうなのか？」
「うん。さっきの時間もそうだし。会える人もそう。
そしてこれが一番大切なんだけど」
「・・・・・」
「自分と同じ名前の人の体を借りなきゃいけないの」
最初、言ってる事があまり理解できなかった。
「つまり、その体は柳さんのか？」
「うん、そういう事。この時間だけは私になるの」
その間、柳双葉がどうなるのか聞こうと思ったが、やめた。
時間は8時半を示していた。
双葉がもう一人の双葉でいる時間は残り1時間半だった。
「なぁ、双葉。明日もいるのか？」
「いない・・・。これは最後のチャンスだから」
「そうか・・・・」
「うん・・・」

俺は涙を堪えていた。
「優斗、私との約束覚えてる？」
「あぁ、しっかり覚えてるよ」
「ちゃんと守ってよね？」
「分かってる。俺を信じろ」
「うん」
双葉は笑顔でそう言った。
俺はそんな双葉の笑顔を見つめた。
二人が初めてキスした日のように俺達は見つめあった。
そしてあの日のようにキスをした。
あの日とは違って、長いキスをした。
２回目のキスは、悲しい味がした。
分からないけど、きっと涙の味なんだろうと思った。
俺達はその後、話をした。
小さい頃の話。ずっとずっと小さかった頃の話を。

気付けば時間は９時半を過ぎていた。
もう双葉との時間も３０分をきっていた。
俺はあの時、伝えることの出来なかった言葉を伝えることにした。

第１５話：最後の言葉

「双葉、お前に会えて本当によかったよ」
「・・・・・・」
双葉は何も言わず静かに聞いていた。
「前にお前が言ったように、お前も俺だ」
双葉の目には涙が流れていた。
「本当は最後の日に伝えるつもりだった。
だけどお前は目を閉じて返事をしてくれなくて・・・」
俺の目にも涙が溢れていた。
「お前さ、俺に幸せになれって言ったよな。
その約束だけは何が会っても守るよ」
双葉は涙を流しながら頷いていた。
「でも、１つだけ忘れないで欲しいことがあるんだ。
俺がこの先、誰かを愛して結婚しても、
俺の中で一番大切なのはお前だ。
それは永遠に変わらない。俺が死んでもだ。
それだけは忘れないでくれ」
俺達二人は涙を流していた。
もう言葉を発する事も出来ないほど苦しかった。

時間が経つにつれ、双葉の体が薄くなっていった。
「優斗、本当のさよならだね」
「あぁ」
「優斗、泣くのはやめて。最後は笑顔で別れよう」
「そうだな。分かった」
俺は無理やり笑顔を作った。
「じゃあね、優斗。愛してるよ。ずっとずっと」
「俺も、愛してる。誰よりも双葉、お前のことを」

「最後にその言葉が聞けてよかった」
双葉はそう言って消えた。
我慢していた涙が一斉に溢れてきた。
止まらなかった。止まるはずがなかった。
「大丈夫？」
前からそんな声が聞こえた。
前にそっと視線をやると柳双葉がいた。
俺がどうして泣いてるのか分からず困惑気味のようだった。
「優斗君、どうかしたの？」
「いや、なんでもないよ」
「そう、それならいいんだけど」
「あぁ。驚かせて悪かったな」

俺と柳双葉が付き合い始めたのは、
あの日から3年もの月日が流れてからだった。
勿論、あの日の事は双葉に話していない。
双葉は気になるようだが聞いてはこない。

そしてまた3年の月日が流れた・・・

最終話：心の中に

俺、秋月優斗はもう２７歳だ。
双葉が亡くなってから１０年の歳月が流れた。
少し向こうで、柳双葉は料理をしている。
俺と柳双葉は、一ヶ月前に結婚した。
「ねぇ優斗、ご飯できたよ」
「分かった。今行くよ」

「なんか、優斗嬉しそうだね」
「そうか？」
「うん、なんかあったの？」
「大切な人との約束は守れたって事かな」
「へぇ、どんな約束なの？」
「必ず幸せになる、だよ」
双葉は少しだけ顔を赤くした。
「じゃあ、優斗は今、幸せなんだね」
「あぁ。とってもな」
「なんか私も嬉しくなってきちゃったな」
「そぅだな。きっと俺達二人は幸せだ」
「なんか照れるな」
赤い顔をさらに赤くしながら双葉は言った。
「あぁ。俺もちょっと照れるな」
俺達二人は笑いあった。

時々ふと思うことがある。
もし、双葉が生きていたら俺の隣にはあいつがいたのだろうか？
きっといたと思う。いや必ずいたはずだ。

なぜなら双葉はまだ俺の中で生きている。

双葉聞こえてるかな？

双葉、俺さお前との約束通り幸せになったよ

それでも、やっぱりお前が俺の中で一番大切な人だ。

前にも言ったようなそれだけは変わらないから。

いつか、きっとまた会えるよな。

その時までは俺の中にいてくれよな。

そういえば、こんなタイトルの映画があったよな。

君はいつまでも僕の心の中に。

まるで今の俺達二人みたいだな。

双葉、お前はいつでも側にいてくれる。

そう、俺の心の中に。

最終話：心の中に（後書き）

これで、心の中にも終わりを向かえました。
読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3108c/

心の中に

2010年10月12日13時52分発行